

## 1. はじめに

港湾物の主要な施設のひとつである防波堤の設計においては、信頼性設計法の適用が標準となっている。港湾基準<sup>1)</sup>においては、力の釣合いに基づいた部分係数法が標準的な方法として位置づけられている。この部分係数は信頼性解析によりキャリブレーションされた値であり、部分係数法の採用によって、たとえ間接的とはいえ、破壊確率を制御しているとみなすことが出来る。ところで、港湾基準では性能設計の体系が導入されており、標準的な性能照査法以外の手法の適用も許容されている。

防波堤の外部安定モードのうち滑動については、運動方程式の2回積分により得られる滑動量を対象にモンテカルロシミュレーション（以下、MCS）に基づいて設計供用期間の累積滑動量に関して確率的な評価を行う方法<sup>2)</sup>が提案されて久しく、部分係数法の代替法として認識されている。MCSの適用に際しては計算負荷が問題となる。防波堤の累積滑動量に関しては crudeMCS（原始的なMCS：効率化の手法を適用しないMCS）と超一様分布列<sup>3)</sup>を用いた検討で少なくとも20万回程度の試行回数が必要であると報告されている<sup>4)</sup>。

MCSにおいて収束を早めるための工夫として数多くの研究事例がある。例えば、超一様分布列と重点サンプリング法<sup>5)</sup>の併用<sup>6)7)</sup>、ラテン方格サンプリング<sup>8)</sup>と重点サンプリング法の併用<sup>9)</sup>など、数多くの研究事例があげられる。

MCSにおける効率化の既往の研究の多くは、耐力を作用効果が上回った時に破壊と判定される問題を扱っているのに対して、本研究で対象とする防波堤の累積滑動問題は、設計供用期間50年間の累積の滑動量が許容値を上回った時に破壊と判定される問題である。即ち、1回の波浪の作用により滑動が生じ、これが許容値以下の小さな値であったとしても50年間の累積により許容値を超える可能性を有する。逆に、1回の波浪作用により滑動が生じない場合には、滑動量はゼロと評価される。後述するように、このような問題の特殊性が一般的に用いられる効率化の手法の簡単な適用を困難にしている。

本研究では、MCSによる防波堤の設計供用期間の累積滑動量に関する破壊確率評価に関して、効率化の手法を検討する。

提案する手法は、1年の波浪作用による滑動量の確率分布関数を重点サンプリング法を用いて求め、これを設計供用期間の累積量評価に用いるものである。

## 2. 防波堤の累積滑動量に関する破壊確率の算定方法

MCSを用いた防波堤の累積滑動量<sup>2)</sup>に関する破壊確率の算定方法は以下の通りである（図-1）。

まず、極値分布に従って沖波波高をサンプリングし、浅水変形、砕波変形を考慮して堤前位置での有義波高を求める。有義波高は波群の代表波高であるので、レーリー分布を適用することで個別波高を求める。この際に砕波の影響を考慮する。

次に、式(1)に示す滑動に関する運動方程式を右辺が正の条件下において2回積分することにより1波毎の滑動量を算定する。これを1年間繰り返すことにより累積滑動量を求める。これを滑動量許容値と比較し、破壊か安定かの判定を行う。以上の試行を繰り返すことにより破壊確率を評価する。

$$\left(\frac{W}{g} + M_a\right) \frac{d^2x}{dt^2} = P_H - f(W' - P_U) \quad (1)$$

ここに、 $W$ ：堤体の空中重量(kN/m)、 $g$ ：重力加速度(m/s<sup>2</sup>)、 $M_a$ ：付加質量(=1.0855 $\rho_0 h^2$ ) (t/m)、 $\rho_0$ ：海水の密度(1.03t/m<sup>3</sup>)、 $h$ ：堤体底面から静水面までの高さ(m)、 $x$ ：堤体の滑動量(m)、 $P_H$ ：堤体に作用する水平波力(kN/m)、 $W'$ ：堤体の水中重量(kN/m)、 $P_U$ ：堤体に作用する揚圧力(kN/m)、 $f$ ：堤体底面と基礎との摩擦係数

ここで、高波は毎年1回来襲することとし、その継続時間は2時間としている<sup>2)</sup>。したがって、平均周期を6秒とした場合、1年あたり1200波が防波堤に作用することとなる。また、水平波力および揚圧力の従う波力の時刻歴モデルとしては、衝撃波力および砕波波力成分を表す三角形パルス( $P_2(t)$ )と重複波力成分を表す正弦波形( $P_1(t)$ )を組み合わせた波形モデル<sup>10)</sup>を用いている。

考慮する確率変数は表-1に示す通りであり、12次元問題である。各確率変数の分布については既往の研究<sup>11)</sup>をもとに設定している。なお、正規分布以外の極値分布とレーリー分布は、解析的に確率分布関数の逆演算を行うことが可能である。表中、No.1~7の確率変数は1年に1回のサンプリングとし、No.8~12の確率変数は1波ごとに1回のサンプリングとしている<sup>2)</sup>。この設定の妥当性の吟味は本研究の対象外とするが、後述するように、この確率変数毎のサンプリング回数の差が重点サンプリング法の適用にあたっては大きな影響を持つことになる。

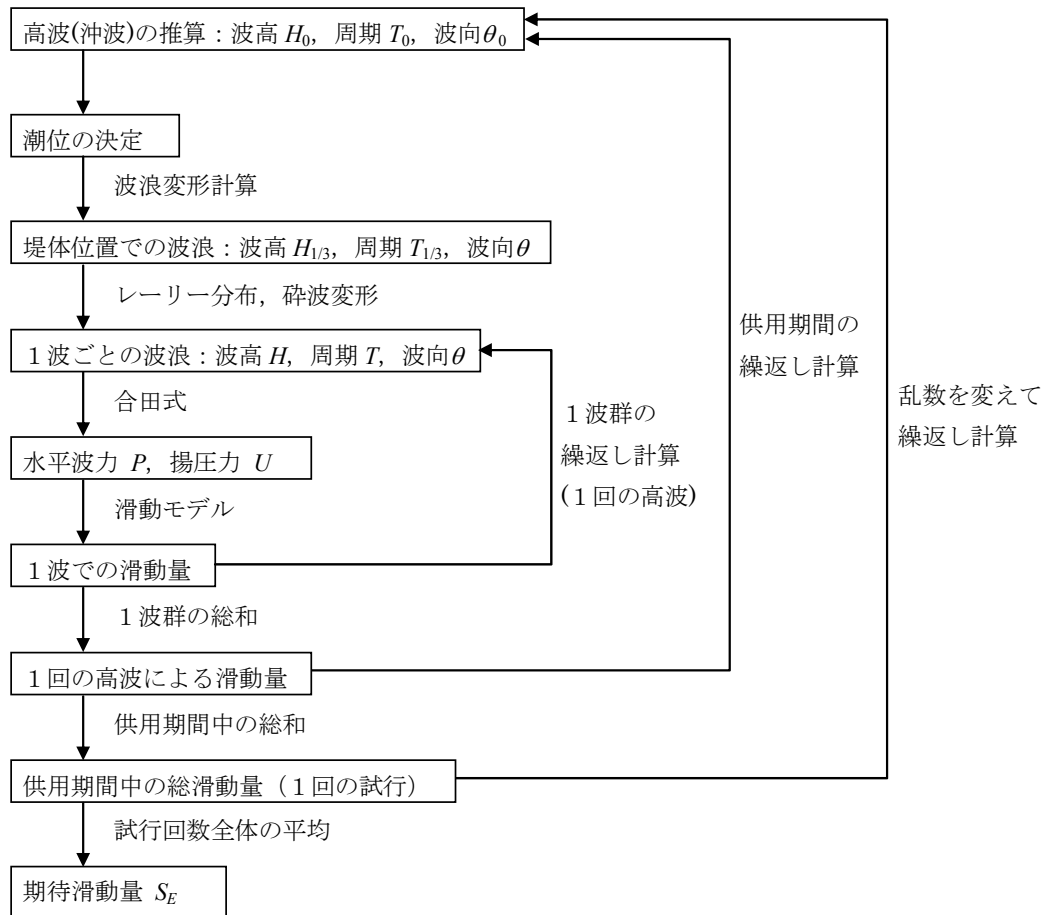


図-1 期待滑動量の計算フロー<sup>2)</sup>

表-1 考慮する確率変数

No.	確率変数	確率分布
1	沖波波高	極値分布 (ワイブル分布など)
2	潮位	正規分布
3	鉄筋コンクリート単位体積重量	正規分布
4	無筋コンクリート単位体積重量	正規分布
5	中詰砂単位体積重量	正規分布
6	摩擦係数	正規分布
7	沖波波高精度・波浪変形計算精度・砕波変形精度	正規分布
8	個別波高	レーリー分布
9	砕波モデル・上限値	正規分布
10	砕波モデル・下限値	正規分布
11	砕波モデル・上下限判別	一様分布
12	波力算定式精度	正規分布

既往の研究<sup>4)</sup>による破壊確率の収束状況の例を図-2に示す。図の水平軸は設計供用期間50年間の計算の繰り返し試行回数である。図中、MTは擬似乱数の発生にメルセンヌ・ツイスタ<sup>12)</sup>を用いた crudeMCS, LDSは超一様分布列のうち一般化 Faure 列<sup>3)</sup>を用いたケースである。通常、超一様分布列を用いることで crudeMCS よりも収束が圧倒的に早くなることが期待できるが、この場合 crudeMCS と比較して収束に大きな優位性はない。他のケースでも同じ傾向であった。

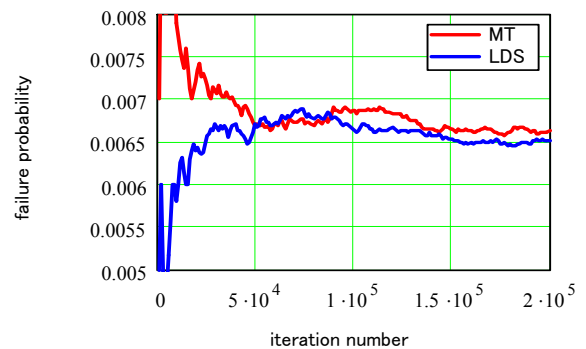


図-2 破壊確率収束状況 (文献4)の結果の例)

### 3. 簡単なモデルによる検討

#### 3.1 単純な累積問題

上述のように、実際の防波堤の累積滑動問題は、設計供用期間 50 年間の累積に関する 12 次元の問題である。実際の防波堤の累積滑動問題の効率化の検討に入る前に、より簡単なモデルで検討する。ただし、本研究では効率化の手法として基本的に重点サンプリング法の適用を試みるため、以降の検討は重点サンプリング法の適用性について主に議論する。

モンテカルロシミュレーションによる破壊確率の評価は式(2)により行われる。式(2)の適用に際し、特に工夫を行わずにそのまま適用するのが crudeMCS である。これに対して重点サンプリング法では、式(3)に示すようにサンプリング密度関数を導入し、これを破壊の生じやすい領域に設定してシミュレーションを行う。その結果、crudeMCS と比較して破壊と判定される回数を多くするとともに、オリジナルの確率密度関数とサンプリング密度関数の比である重み関数を用いて破壊のカウント数を調整することで破壊確率評価の効率化を行う。

$$p_f = \int \dots \int I[g(\mathbf{x}) \leq 0] f_{\mathbf{x}}(\mathbf{x}) d\mathbf{x} \quad (2)$$

$$p_f = \int \dots \int I[g(\mathbf{x}) \leq 0] \frac{f_{\mathbf{x}}(\mathbf{x})}{h(\mathbf{x})} h(\mathbf{x}) d\mathbf{x} \quad (3)$$

ここに、 $p_f$ : 破壊確率、 $f_{\mathbf{x}}(\mathbf{X})$ : 同時確率密度関数、 $h(\mathbf{X})$ : サンプリング密度関数である。また、 $I$ は破壊判定関数であり、 $I < 0$  のときに 1、それ以外はゼロの値をとる。

さて、まず確率変数を正規分布に従う  $R, S$  の 2 種類とし、限界状態関数を式(4)とする。すなわち、 $n$  回の  $R, S$  の独立な作用の累積値による破壊確率の問題とする。

$$Z = d_a - \sum_{k=1}^n (S_k - R_k) \quad (4)$$

ここに、 $d_a$ : 変形量許容値

いま、 $R=N(1.1,0.2)$ ,  $S=N(0.9,0.25)$ ,  $d_a=0.05$ ,  $n=15$  とする。確率変数が正規分布に従い、かつ限界状態関数が線形であるため、この問題の正確な破壊確率は一次信頼性理論 FORM<sup>13)</sup>によって求めることができる。信頼性指標  $\beta=2.46$  であり、破壊確率は  $6.95 \times 10^{-3}$  となる。さらに、感度係数は  $R, S$  それぞれについて 0.161, -0.202 となり、design point は信頼性指標と感度係数より  $R, S$  それぞれについて 1.021, 1.024 となる。なお、design point は限界

状態局面（限界状態関数がゼロとなる局面）のうち同時確率密度が最も大きくなる点であり、感度係数および design point は FORM により信頼性指標を求める際に同時に求めることができる。この問題の場合、耐力  $R$  について示すと、それぞれ式(5)、式(6)となる。なお、作用効果  $S$  については感度係数が負となる。

$$\alpha_{R_k} = \left( \frac{\partial Z}{\partial R_k} \right)_{R_k^*} \frac{\sigma_{R_k}}{\sigma_Z} = \frac{\sigma_R}{\sqrt{n(\sigma_R^2 + \sigma_S^2)}} \quad (5)$$

$$R_k^* = \left( 1 - \alpha_{R_k} \beta \frac{\sigma_R}{\mu_R} \right) \mu_R \quad (6)$$

ここに、 $\alpha$ : 感度係数、 $\mu$ : 平均値、 $\sigma$ : 標準偏差であり、記号\*は design point における値を示す。

重点サンプリング法においては、FORM により得られる design point をもとにサンプリング密度関数を設定することが一般的と考えられる。

この問題の場合も、サンプリング密度関数として標準偏差は変えずに平均値を design point に設定した正規分布を適用した重点サンプリング法によって、図-3 に示すように効率よく破壊確率を求めることが可能である。図の水平軸は試行回数、鉛直軸は破壊確率推定値、判例は、IS が重点サンプリング法、crude は crudeMCS である。

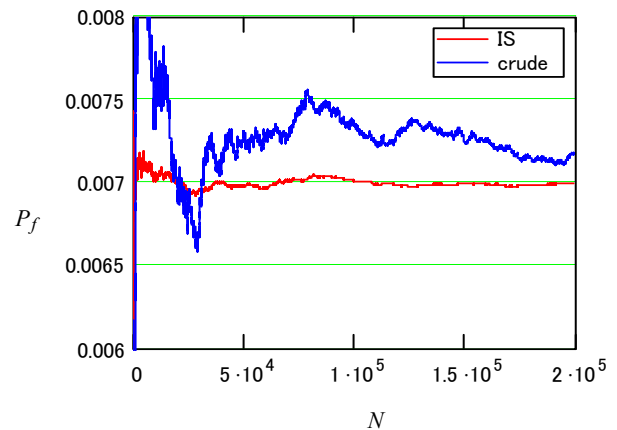


図-3 破壊確率収束状況

ただしここで、式(5)に示したように感度係数は累積の回数  $n$  に依存して変化し、累積回数が多いほど絶対値が小さくなることに注意する必要がある。また、design point は、累積の回数  $n$  が大きくなるほど平均値に近くなるこ

とが式(6)より分かる。換言すると、累積の回数  $n$  が大きくなればなるほどサンプリング密度関数はオリジナルの密度関数と近いものとなり、重点サンプリング法と crudeMCS の差が小さくなるといえる。この累積問題が通常の多次元問題と異なる点は、多次元問題では多くの場合に主要な確率変数が存在していて、主要な確率変数の感度係数は無視し得ない値を持ち、これによりサンプリング密度関数の設定に意義がある場合が多いのに対して、累積問題では同じ確率分布に従う変数が繰り返し現れるために感度係数の絶対値は累積の度合いに応じて減少していくという点にあるといえる。従って、累積の度合いが激しい問題においては重点サンプリング法の適用に当たって慎重な検討が必要であるといえる。

### 3.2 確率変数間でサンプリング回数が異なる単純な累積問題

次に、上述した防波堤の累積滑動問題のように確率変数間でサンプリング回数が異なる条件について考える。式(4)を  $R$  について式(7)のように変更する。

$$Z = d_a - \sum_{j=1}^m \sum_{k=1}^n (S_{j,k} - R_j) \quad (7)$$

$R, S$  の確率分布が 3.1 節と同じ場合には感度係数は式(8)に示す通りとなり、 $m=3, n=5$  の条件では  $R$  と  $S$  でそれぞれ 0.504, -0.126 となり大きな差が生じる。信頼性指標を  $\beta=2.46$  とするためには  $d_a=1.88$  となる。この時 design point は  $R, S$  それぞれについて 0.852, 0.977 となる。

$$\alpha_{R_j} = \left( \frac{\partial Z}{\partial R_j} \bigg|_{R_j^*} \right) \frac{\sigma_{R_j}}{\sigma_Z} = \frac{n\sigma_R}{\sqrt{mn^2\sigma_R^2 + mn\sigma_S^2}} \quad (8)$$

$$\alpha_{S_k} = \left( \frac{\partial Z}{\partial S_{j,k}} \bigg|_{S_{j,k}^*} \right) \frac{\sigma_{S_{j,k}}}{\sigma_Z} = \frac{-\sigma_S}{\sqrt{mn^2\sigma_R^2 + mn\sigma_S^2}}$$

MCS による破壊確率の収束状況を図-4 に示す。上記の design point をもとにサンプリング密度関数を設定した重点サンプリング法を IS1, 3.1 節と同じサンプリング密度関数による重点サンプリング法を IS2 として crudeMCS の結果とともに示している。IS2 は精度が悪く、design point の正確な評価が非常に重要であることがわかる。

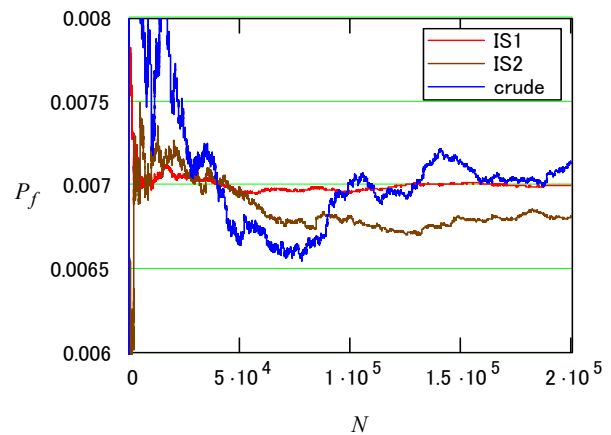


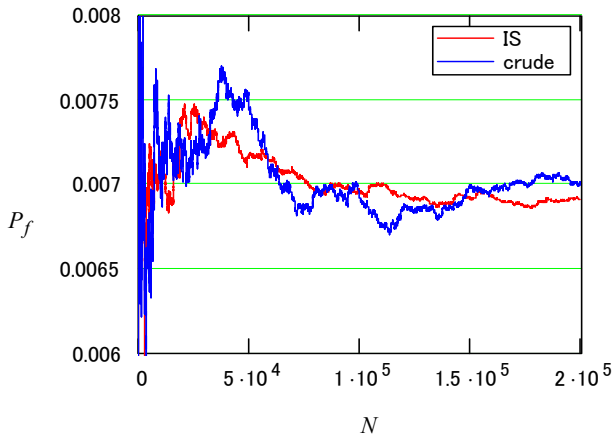
図-4 破壊確率収束状況

### 3.3 防波堤の滑動問題に類似した単純な累積問題

防波堤の滑動問題では、作用効果  $S$  が耐力  $R$  よりも小さい場合は滑動が生じない。即ち、 $S < R$  の場合は、 $S-R=0$  となる。この条件を 3.1 節の式(4)に反映させてみる。

いま、 $R, S$  の確率分布はこれまでと同じとし、収束の状況を確認するために破壊確率が同程度になる条件を探索すると、 $d_a=2.18$  とすることでほぼ同程度の破壊確率となる。この問題は FORM では扱えない複雑な条件であるので、crudeMCS の 20 万回試行時の破壊確率で評価している。 $S < R$  の時に  $S-R=0$  となるため、先の場合と比較して破壊が生じやすくなっている。このため破壊確率を同程度にするためには  $d_a$  の値を大きく設定する必要がある。なお、この問題では限界状態関数の平均値と標準偏差自体は比較的容易に評価が可能である。即ち、 $S_k - R_k$  の平均値と標準偏差はそれぞれ  $\mu=0.052, \sigma=0.119$  と求まるので、限界状態関数の平均値は  $d_a - n\mu$ 、標準偏差は  $n^{1/2}\sigma$  によって評価できる。ただし、この平均値と標準偏差から信頼性指標や破壊確率を評価すると誤差が非常に大きい。

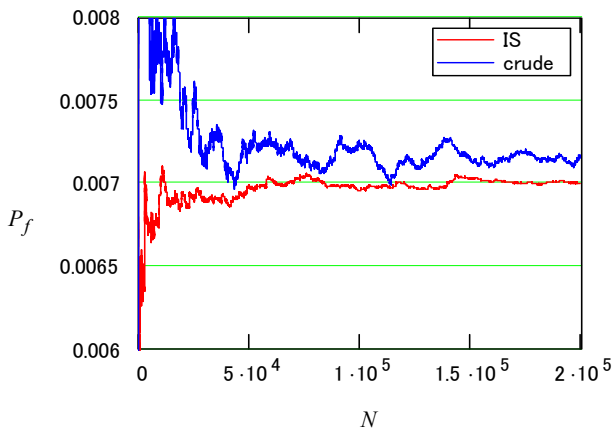
このように、この問題の場合は design point が不明である。仮に 3.1 節と同じサンプリング密度関数による重点サンプリング法と crudeMCS で収束状況を確認すると図-5 のようになる。図-3 との比較により、重点サンプリング法の収束状況が悪くなっていること、逆に crudeMCS の収束が良くなっていることがわかる。前者については design point が不明であることからサンプリング密度関数の設定が良くないことが原因と考えられる。後者については、 $S < R$  の時に  $S-R=0$  となることから限界状態関数の確率分布の右側の裾が  $d_a$  を上回らない、即ち確率分布の分散が 3.1 節の条件と比較して減少しているため、通常の問題よりも収束が早くなっていると考えられる。



図一五 破壊確率収束状況

### 3.4 確率変数間でサンプリング回数が異なる条件の防波堤の滑動問題に類似した累積問題

次に、 $S < R$  の場合は  $S-R=0$  となる条件を 3.2 節の式(7) に反映させてみる。これまでと同様に  $R, S$  の確率分布は変えずに破壊確率が同程度になる条件を crudeMCS で探索すると、 $d_0=3.08$  でほぼ同程度の破壊確率となる。前節と同様に design point は不明であるので、3.2 節と同じサンプリング密度関数による重点サンプリング法と crudeMCS で収束状況を確認すると図一六 のようになる。この条件では重点サンプリング法は良く機能していると考えられる。図一四 との比較によっても、あまり遜色がないといえる。この理由は、限界状態関数の中での  $R$  の繰り返し回数が 3 回と少なく、 $S < R$  の時に  $S-R=0$  という特殊な条件の影響が  $R$  に対して少ないこと、かつ 15 回繰り返される  $S$  の感度を低く見積もったために  $S$  に対するサンプリング密度関数とオリジナルの密度関数に大きな差がないことなどが原因と考えられる。



図一六 破壊確率収束状況

## 4. 防波堤の累積滑動量に関する破壊確率評価の効率化の検討

### 4.1 提案法の基本的考え方

ここまでの検討で、防波堤の設計供用期間の滑動量のような累積問題に対して重点サンプリング法を適用する場合には、特に累積回数が多い確率変数について注意が必要であることが分かった。以下では、この課題を解決する方法について議論を行う。

2. で述べたように、防波堤の設計供用期間の滑動量の問題では、1年に1回サンプリングされる確率変数と、1年間に波数に応じてサンプリングされる確率変数がある。そして、後者は1年間に1000回程度以上サンプリングされる可能性がある。ここまでの知見から、後者については重点サンプリング法の対象とするのは困難である可能性が高いといえる。よって本研究では前者の確率変数を対象とする。

防波堤の設計供用期間は通常50年とされるため、前者の確率変数についても50回の累積問題となる。3.1で述べたように、累積回数が多くなると感度が低下するために最適なサンプリング密度関数とオリジナルの密度関数の差が少なくなり、重点サンプリング法のメリットが少ないと考えられる。

そこで本研究では、50年間の累積問題を、まず1年間の累積問題として取り扱い、重点サンプリング法を用いて累積滑動量の確率分布関数を数値的に評価する。これをMCS1とする。次に1年の確率分布関数から確率密度関数を数値的に評価し、これをもとに設計供用期間の50回独立にサンプリングして累積する。これをMCS2とする。MCS2の結果から50年間の累積滑動量の確率分布関数を数値的に評価することで、任意の滑動量（許容値）に対する超過確率を評価できる。

この手法のメリットは、まずMCS1では1年に1回サンプリングされる確率変数を対象に重点サンプリング法を適用することで効率化が期待できること、さらに、通常的设计供用期間を対象としたMCSでは設計供用期間×試行回数の試行が必要になる（試行回数20万回の場合、50年分×20万回=1000万年回相当の試行が必要となる）のに対して、本研究の方法では1年の滑動量に関するMCS1の試行回数と50年累積のMCS2の試行回数の和でよいことにある。特に、後者のMCSは波浪の演算や運動方程式の積分等の演算を伴わないために計算負荷が非常に少ないことも利点である。

表-2 検討ケースの設計条件

ケース No.	沖波				堤前波			潮位 (wl)	海底勾配 (s)	摩擦係数 (μ)	壁前面の 水深(h)	ケーソン設 置 水深 (h')	根固工 水深 (d)	マウンド肩 幅 (BM)
	母分布 関数	形状母数 (k)	尺度母数 (A)	位置母数 (B)	有義波高 (H1/3)	最高波高 (Hmax)	有義波 周期 (T1/3)							
	-	-	-	-	m	m	s							
1	ワイブル	1.4	1.545	5.177	8.99	14.57	14.00	0.50	0.008	0.75	21.00	16.00	13.30	12.1
2	ワイブル	1.4	2.168	6.697	11.10	15.72	14.10	0.50	0.010	0.75	21.50	17.00	14.30	12.6
3	ワイブル	1.4	2.174	4.865	9.55	13.23	14.00	0.50	0.009	0.75	17.50	13.50	10.30	11.5
4	ワイブル	1.4	1.545	5.177	8.99	14.64	14.00	0.70	0.008	0.60	21.00	16.00	13.30	12.5
5	ワイブル	1	0.994	5.511	8.80	14.96	13.00	1.50	0.014	0.60	22.00	16.50	15.00	8.0
6	ワイブル	1.4	2.395	4.154	8.89	11.94	13.00	0.40	0.023	0.60	14.70	12.50	10.50	13.5
7	ワイブル	2	4.604	1.984	10.37	16.32	14.00	1.50	0.002	0.60	23.20	16.50	13.00	10.0
8	ワイブル	1	1.187	4.257	7.85	10.67	13.00	1.50	0.010	0.60	12.70	9.50	8.00	10.0
9	ワイブル	2	4.721	1.355	9.58	13.85	12.70	1.30	0.010	0.75	18.50	13.00	11.50	15.8
10	ワイブル	2	4.908	0.952	8.72	11.60	13.32	0.90	0.010	0.75	14.50	12.00	10.50	11.0
11	ワイブル	2	4.908	0.952	9.38	13.01	13.32	0.90	0.010	0.75	17.00	13.00	11.50	15.6
12	ワイブル	2	3.258	2.357	7.33	9.93	11.40	1.60	0.010	0.60	12.00	9.00	8.00	7.5
13	ワイブル	1	0.934	1.093	4.33	7.77	7.80	2.37	0.005	0.60	17.20	10.00	9.00	6.5
14	ワイブル	1.25	0.875	0.896	3.16	4.84	7.00	0.40	0.020	0.60	6.60	5.00	4.00	9.4
15	ワイブル	1.5	1.648	4.837	8.35	13.00	12.40	0.40	0.010	0.60	18.70	13.50	12.30	13.7
16	ワイブル	2	3.692	1.498	8.45	11.80	14.50	1.50	0.010	0.60	14.10	10.00	8.80	13.2
17	ワイブル	2	4.505	3.735	10.58	14.26	14.30	0.90	0.009	0.60	18.40	13.00	11.50	10.1
18	ワイブル	2	4.505	3.735	10.83	14.71	14.30	0.90	0.017	0.75	18.50	12.00	9.60	9.6

※水深は潮位を除く値。根固工水深は、根固工天端、マウンド被覆工天端のいずれか小さい方の値

#### 4.2 検討条件

以下の検討対象には、全国の設計資料から設計条件の偏りが無いように抽出したケーソン式混成堤の建設事例18ケースを用いた。旧基準による設計断面であるため安全率をもとに設計されており、滑動安全率は1.2程度の事例である。信頼性指標としては2.4程度ということになる。沖波波高の極値分布は全て波浪の分野で非常に多く現れる分布であるワイブル分布であり、確率分布関数 $F_X(x)$ および確率密度関数 $f_X(x)$ はそれぞれ式(9)および式(10)により与えられる。

$$F_X(x) = 1 - \exp\left\{-\left(\frac{x-B}{A}\right)^k\right\} \quad (9)$$

$$f_X(x) = \frac{k}{A} \left(\frac{x-B}{A}\right)^{k-1} \exp\left\{-\left(\frac{x-B}{A}\right)^k\right\} \quad (10)$$

検討ケースの極値分布に関するパラメータなどは表-2に示すとおりである。

#### 4.3 1年間の累積滑動量の確率分布関数の評価 (MCS1)

表-1に示した確率変数の中で年1回サンプリングされるNo.1~7の確率変数のうち、感度が高いと考えられるものは沖波波高、摩擦係数、沖波波高精度・波浪変形計算精度・砕波変形精度（簡単のため以下これを波浪精度と呼ぶ）である。よって本研究では以上の3種類のパラメータについて重点サンプリング法の対象とする。

これらのパラメータのうち、再現期間50年の設計波高を対象とした滑動に関する力の釣合いを対象としたFORMの検討<sup>14)</sup>より、感度係数は摩擦係数について0.689、波力について-0.704程度である。ただし、この波力の感度係数には波力算定精度が含まれているため、波浪精度単独の感度係数は明らかではない。

本研究では波浪精度と波力算定精度の各々の分散の比例配分をもとに、波浪精度の感度係数としては概ね-0.25と評価した。なお、この感度係数や信頼性指標は力の釣合に基づく評価により得られた値であり、滑動量そのものに対応した値ではない。ただし、滑動量に対応したdesign pointは解析的に求めることは困難であることから、本研究では摩擦係数と波浪精度について、この感度係数と信頼性指標2.4を用いてサンプリング密度関数の設定を行う。サンプリング密度関数は確率分布のうち標準偏差はオリジナルの値とし、平均値を式(6)により設定する

ものである。

次に、沖波波高について検討する。上述の通り、本研究で対象とする極値分布はすべてワイブル分布である。ワイブル分布は下限値を持つ分布であり、下限値が  $B$  である。従って、サンプリング密度関数の設定においてパラメータ  $B$  を変更してしまうと、下限値近傍で値がサンプリングされた場合に、オリジナルの確率密度関数とサンプリング密度関数の比である重み関数の値が非常に大きな値となり、不都合が生じることが予想されるため、それ以外のパラメータを変更してサンプリング密度関数を設定することとする。

いま、防波堤の設計波である再現期間 50 年の沖波波高をサンプリング密度関数において再現期間  $n$  年相当に変換することを考える。再現期間 50 年は確率分布関数の値が  $1-1/50=0.98$  の条件である。同様に、 $n$  年の場合は確率分布関数の値が  $1-1/n$  となる。この関係を用いて、パラメータ  $A$  を式(11)による  $A'$  に変更することによってサンプリング密度関数を設定する。

$$A' = A \left\{ \frac{\ln(0.02)}{\ln(1/n)} \right\}^{\frac{1}{k}} \quad (11)$$

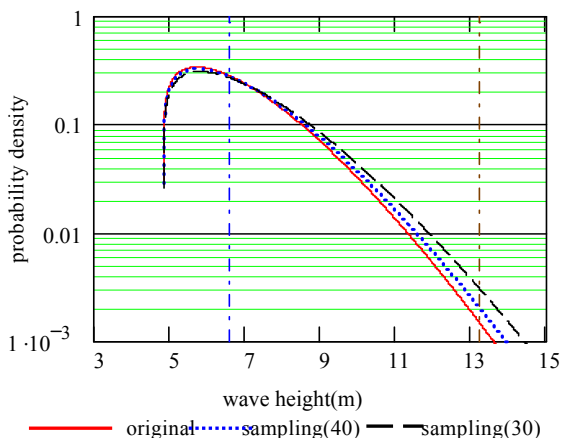


図-7 サンプリング密度関数 (ケース 3)

一例として表-2 に示したケース 3 の条件で、オリジナルの確率密度関数 (original) , 再現期間 50 年の沖波波高を 40 年相当に設定したサンプリング密度関数 (sampling(40)) , 同じく 30 年相当に設定したサンプリング密度関数 (sampling(30)) の比較を図-7 に示す。図中の縦線は、沖波平均波高 (6.61m) および堤前最高波高

である。sampling(30)では堤前最高波高程度で確率密度が 2 倍程度になる。

次に同じケースで、沖波波高にのみサンプリング密度関数を導入した重点サンプリング法と crudeMCS との比較を行った。

検討条件として 1 年の累積滑動量に対する破壊確率を  $10^7$  回の試行で評価した。滑動量許容値を 5cm とした場合の破壊確率の収束状況を図-8 に示す。擬似乱数は何れもメルセンヌ・ツイスタを用いている。

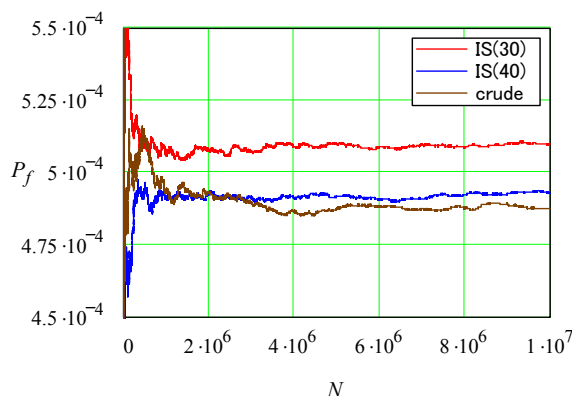


図-8 破壊確率収束状況 (ケース 3)

図の凡例のうち、IS(40)、IS(30)はそれぞれ図-7 の sampling(40)、sampling(30)のサンプリング密度関数を用いた重点サンプリング法である。

図より、crudeMCS と重点サンプリング法のうち IS(40) は破壊確率推定値が同程度であるが、IS(30)は破壊確率を過大に評価している。また、図には示していないが、20 年、10 年に設定した場合はさらに過大評価となった。この理由について考察する。

沖波波高は波群の代表波高である有義波高であるが、最終的に滑動の運動方程式を評価する際に用いられる個別波高は有義波高をもとにしてレーリー分布に従って再度サンプリングされる。さらに、個別波高に対しては砕波の判定が行われるため、高い個別波高がサンプリングされた時は砕波が生じると判定されて棄却される場合が増加する。

サンプリング密度関数の導入により高い沖波波高をサンプリングしやすいように設定するということは砕波しやすいように設定することでもあり、サンプリング密度関数の導入が破壊を生じやすく設定するという重点サンプリング法の趣旨にそぐわない場合がある可能性があるといえる。

さらに、低い沖波波高がサンプリングされた場合には逆に碎波が生じにくくなるために破壊の生じやすさが沖波波高の高さに応じて必ずしも減少するわけではない可能性がある。ところが、破壊確率の評価の際に重み関数を導入するので、サンプリングされた沖波波高が低く、重み関数の値が高い条件では破壊の回数を多く判定することになる。

このような理由で、極値分布におけるサンプリング密度関数をオリジナルの密度関数から大きくずらしてしまうと破壊確率の精度が悪くなると考えられる。このため、本研究ではケーススタディの結果を踏まえてサンプリング密度関数は再現期間 50 年の波高が 40 年相当となるように設定した。なお図-8 に示した結果では重点サンプリング法の効果が crudeMCS と比較してあまり明瞭ではないが、最終的な重点サンプリング法の効果についてはサンプリング密度関数の組み合わせ方と含めて以下で検討する。

以上の条件で重点サンプリング法の適用を検討するが、本来は海象条件などに応じて適切なサンプリング密度関数の設定方法が変化する可能性がある。沖波波高以外のパラメータを含めて、サンプリング密度関数の最適な設定方法の吟味については今後の課題としたい。

次に、重点サンプリング法におけるサンプリング密度関数の組み合わせについて検討する。摩擦係数のみを重点サンプリング法の対象とした場合を IS1、摩擦係数と波浪精度を対象とした場合を IS2、IS2 に極値分布を対象に加えた場合を IS3 とし、それぞれを crudeMCS と比較した。

図-9 に、これまでと同じケース 3 について、滑動量許容値  $d_a$  を 2cm, 5cm, 10cm とした場合の 1 年間の破壊確率の収束状況を示す。

図より、重点サンプリング法は何れの方法においても crudeMCS と比較すると収束が良いことがわかる。従って、MCS1 として重点サンプリング法を適用することで効率化が期待できると考えられる。検討対象とした他のケースについても概ね同様の傾向であった。また、 $10^7$  回試行時の破壊確率は、図-9 の例では IS1 のみやや低い破壊確率を示す傾向にあったが、他の例を含めると必ず低い破壊確率となるわけではなかった。

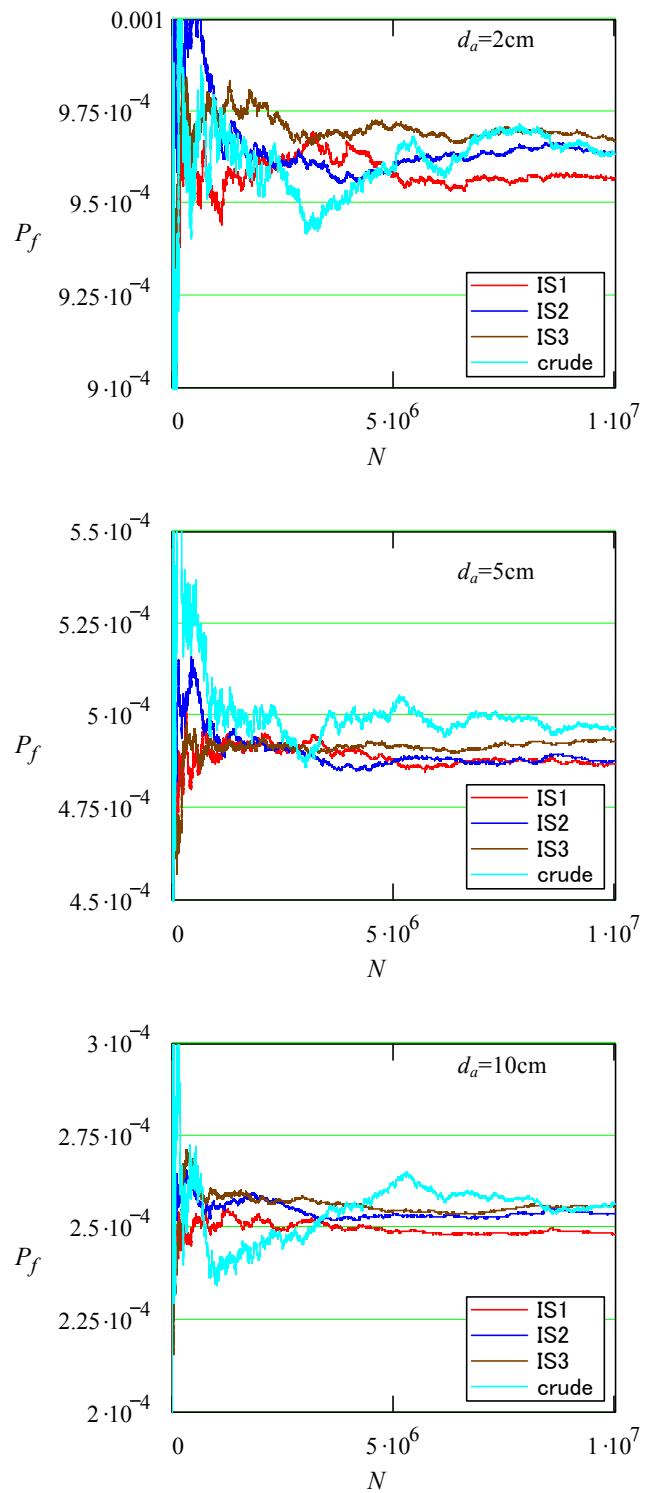


図-9 破壊確率収束状況 (ケース 3)



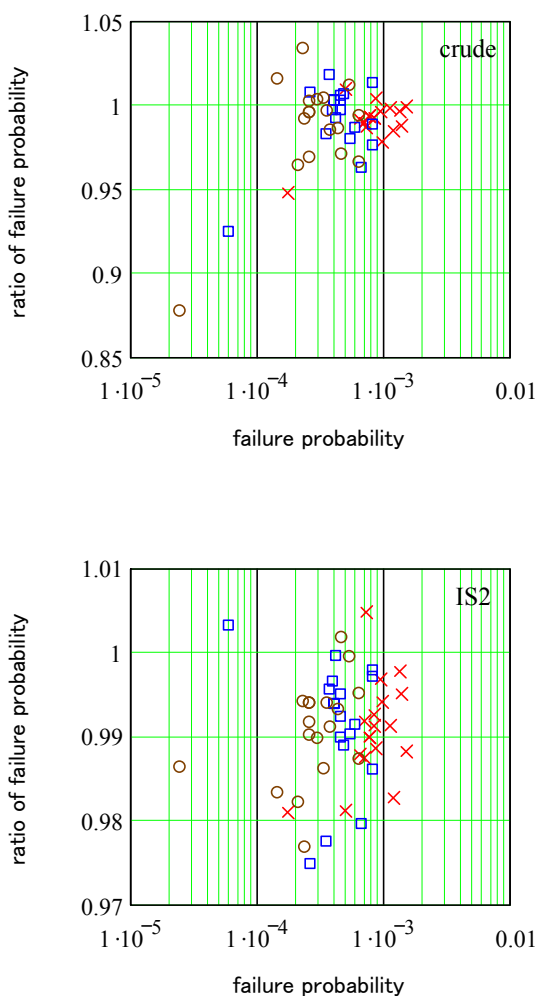


図-10 破壊確率比

図-10 には、IS3 による破壊確率を基準として、crudeMCS および IS2 による破壊確率の比を示した。水平軸は IS3 による破壊確率である。ここでの破壊確率はどれも試行回数  $10^7$  回における値とした。比の平均値は、crudeMCS, IS1, IS2 のどれも 0.99 であった。ただし、比の標準偏差は crudeMCS, IS1, IS2 のそれぞれに対して  $0.023$ ,  $6.77 \times 10^{-3}$ ,  $6.45 \times 10^{-3}$  であり、crudeMCS は特にばらつきが大きい。

また、図-10 に示したように、破壊確率が低い条件で IS3 と比較すると小さな破壊確率となるケースがある。最も比の値が小さかったのは表-2 のケース 14 で、これは crudeMCS では  $10^7$  回でも収束していないケースと考えられる。なお、前述のように、検討断面はすべて力の釣合に基づいて安全率として 1.2 相当であるが、砕波の影響を非常に強く受ける地点では波力の時刻歴モデルのうち

パルス成分が卓越し、継続時間の長い重複波成分はパルス成分に対してかなり小さな値となり、このため滑動量は僅かな値となることがある。収束の遅い条件はそのようなケースであるといえる。

図-11 にはケース 14 の  $d_a=10\text{cm}$  における破壊確率の収束状況を示した。crudeMCS が収束していないのに対して、IS では各手法とも良い収束を示していると考えられ、重点サンプリング法が有効であると考えられる。

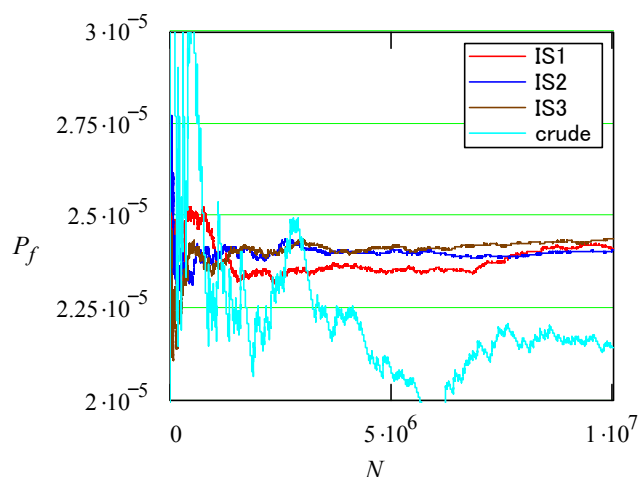
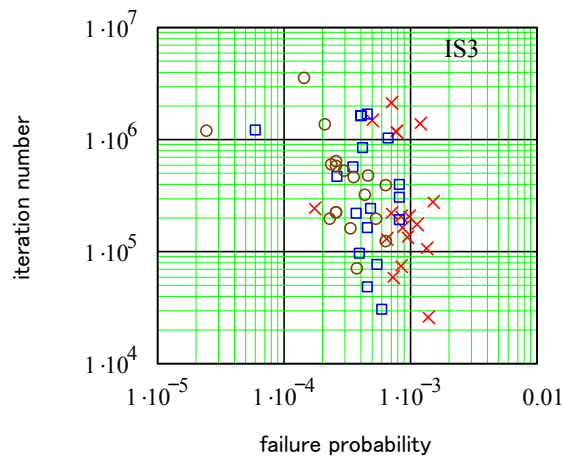
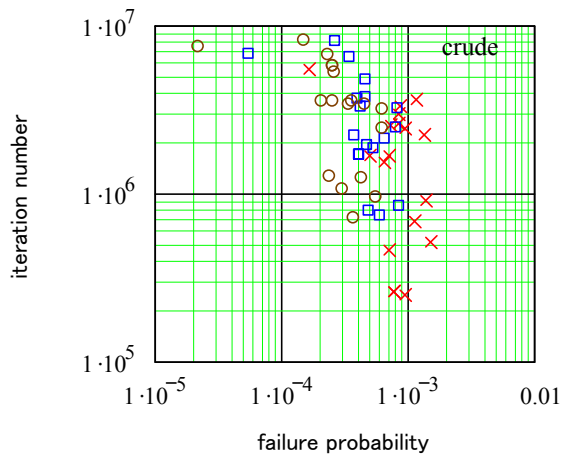


図-11 破壊確率収束状況 (ケース 14,  $d_a=10\text{cm}$ )

次にこのシミュレーションにおいて必要な試行回数について検討する。図-12 に、 $10^7$  回試行時の破壊確率に対して  $\pm 3\%$  の範囲に収まる試行回数を検討した結果を crudeMCS と IS3 について示す。基本的に破壊確率が小さいほど多くの試行回数が必要であるが、crudeMCS では非常に破壊確率が小さな図-11 に示したケースを仮に除外したとしても多くの試行回数が必要である。これに対して IS3 では一例を除いては概ね  $2 \times 10^6$  回で安定的な破壊確率が得られていると判断できる。

IS3 の収束回数で  $2 \times 10^6$  回をかなり上回る例はケース 7 の  $d_a=10\text{cm}$  の例であり、この収束状況を図-13 に示す。



×2cm □5cm ○10cm

図-12 試行回数比較図

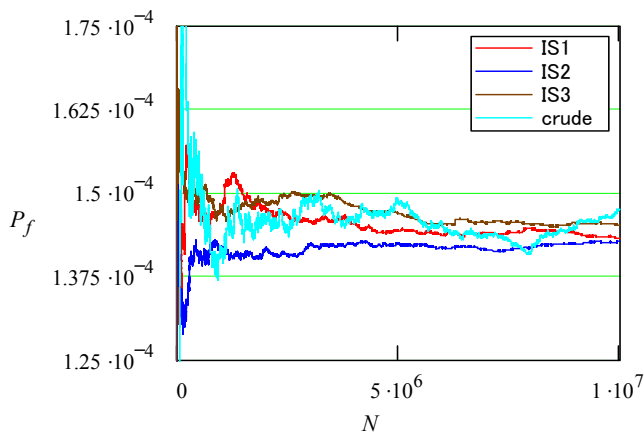


図-13 破壊確率収束状況 (ケース7,  $d_a=10\text{cm}$ )

各ケース毎に IS3 を基準として、各方法によって $\pm 3\%$ で破壊確率が収束する試行回数の比を求めてこれを平均した結果、crudeMCS では 15.98, IS1 では 3.58, IS2 では 1.83 となった。従って、IS1~IS3 とサンプリング密度関数を導入する確率変数を多くするにつれて収束が早くなることわかる。

以上述べた破壊確率の収束値および必要な試行回数に関する結果を踏まえ、本研究では 1 年間の累積滑動量の確率分布関数を求めるためのシミュレーション (MCS1) については、IS3 の重点サンプリング法を用いることとする。また、試行回数は、図-13 に示した一例を除くと  $2 \times 10^6$  回で安定的な解が得られることから  $2 \times 10^6$  回とした。

さて、この MCS1 によって  $2 \times 10^6$  列の、1 年間の累積滑動量と重みの行列が得られるが、ここから 1 年間の累積滑動量の確率分布関数を数値的に評価する。確率分布関数は、累積確率の値が等間隔で刻まれたものにするのが取扱いの面で有利である。従って、確率分布関数の評価方法は次の通りとする。

- ①MCS1 の出力行列を、滑動量に関してソートし、滑動量の大きい試行結果から順に並べ替える。
- ②並べ換えた行列の重みについて、その累積値があらかじめ定めた累積確率の刻み幅になるように 1 列目から順に探索してグループ化する。
- ③各々の累積確率に対応した滑動量を、重みに応じた比例分配によって評価する。

具体的な確率分布関数の評価方法の例を図-14 に示す。ここでは、累積確率を 0.1 刻みになるように設定した場合の例を示している。図中、③の表の  $F(x)$  が累積確率の値である。図-14 では簡単のために確率分布関数における累積確率の刻み幅は細かく設定しているが、本研究では重みの累積は試行回数の  $2 \times 10^6$  にほぼ一致するため、実際にはこれよりも粗く設定する方が取扱いが容易である。

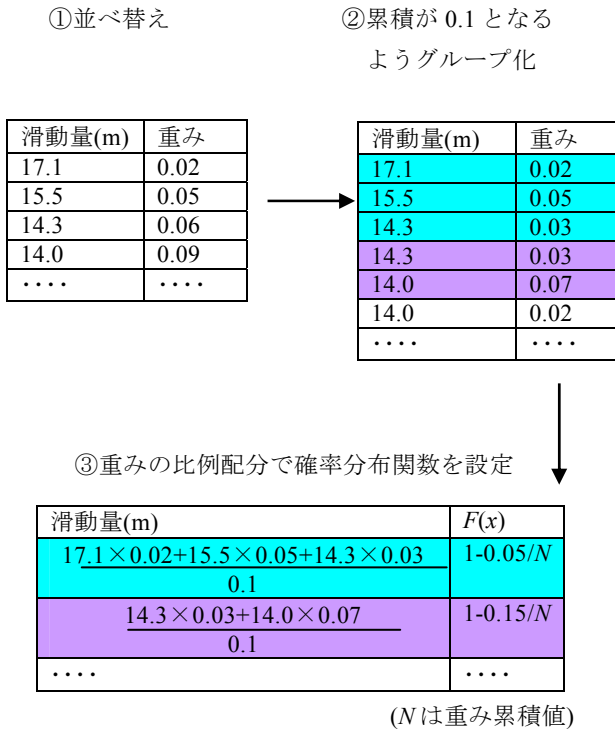


図-14 確率分布関数の評価の例

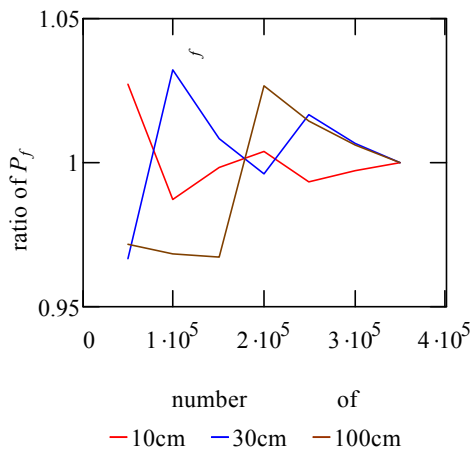


図-15 確率分布関数の分割数と破壊確率の関係

次に、累積確率の最適な分割数について検討するため、ケース 1 を対象に、分割数を 5 万～35 万の範囲で 5 万刻みで確率分布関数を評価し、各々について後述する方法で 50 年の累積滑動量に対する破壊確率を評価した。以降の検討では、50 年の累積滑動量に対する滑動量許容値として既往の研究<sup>15)</sup>により提案されている 10,30,100cm とする。

検討結果を図-15 に示す。水平軸は分割数であり、鉛直軸は 35 万分割時の破壊確率に対する各々の分割数における破壊確率の比である。図より、分割数が少ないケースでは破壊確率の変動が比較的大きいことが分かる。分割数が 25 万以上の範囲では破壊確率は概ね安定していることから、本研究では確率分布関数における累積確率の分割数は 25 万とする。

#### 4.4 設計供用期間の累積滑動量に対する破壊確率の評価 (MCS2)

MCS1 により 1 年間の累積滑動量に関する確率分布関数が数値的に得られたので、ここから 50 回サンプリングして累積することにより 50 年間の累積滑動量の確率分布関数を評価する。

ここで取り上げているのは上述のように実際の設計断面であり、基本的には滑動破壊が生じる可能性が非常に低く設定されている。従って、1 年間の累積滑動量に関する確率分布関数は、大部分の滑動量がゼロとなる。図-16 に、ケース 1 を対象に、1 年間の累積滑動量に関する確率分布関数を示す。ここでは、破壊確率と対応するように、鉛直軸は累積確率（非超過確率）ではなく超過確率 ( $1-F(x)$ ) として示している。

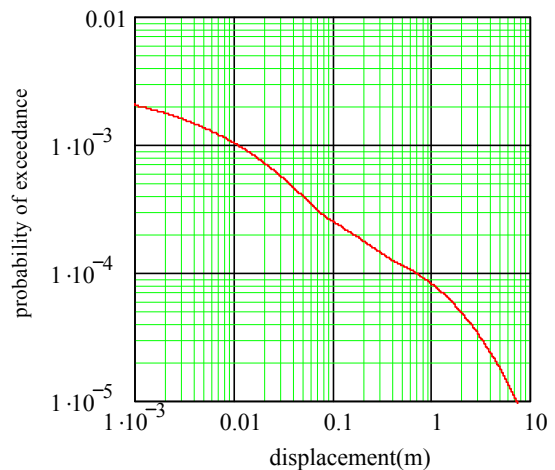


図-16 1 年間の累積滑動量に関する超過確率 (ケース 1)

このケース 1 の例では 1 年間の累積滑動量がゼロとなる確率は 0.997 である。他のケースにおいても同様の傾向を示す。従って、大部分がゼロである確率分布関数からランダムにサンプリングして 50 回累積することは計算効率の観点から望ましくない。

いま 1 年間の累積滑動量がゼロとなる確率を  $p_0$ 、滑動量が正となる確率を  $p_p$  とする。50 回のサンプリングにおいて滑動量が正の範囲から  $n$  回サンプリングされる確率を  $p_n$  とすると、 $p_n$  は以下により得られる。

$$p_n = p_p^n p_0^{T-n} \frac{T!}{n!(T-n)!} \quad (11)$$

ここに、 $T$ : 累積回数であり、本研究の場合 50 である。

ケース 1 を対象に、 $p_n$  を示すと表-3 のとおりである。これより、 $n=1$  まだが全体の 99% を占めており、2 回以上正の値がサンプリングされる確率はきわめて低い。ただし、破壊確率は小さく評価されるであろうことを考えると、正の値が複数回サンプリングされる結果を正確に評価しておくことは重要である。

本研究では、サンプリングされる確率が  $10^{-5}$  以上の回数までのサンプリングを考慮することとした。表-3 に示したケース 1 の場合、 $n=4$  までとなる。

表-3  $p_n$  の例

$n$	$p_n$
0	0.864
1	0.127
2	$9.12 \times 10^{-3}$
3	$4.29 \times 10^{-4}$
4	$1.48 \times 10^{-5}$
5	$4.00 \times 10^{-7}$
...	...

MCS2 においては、設定した確率分布関数の滑動量が正の範囲から偏りなくサンプリングして重ね合わせる必要がある。このため MCS2 では重点サンプリング法は用いず、超一様分布列<sup>3)</sup>を用いることとした。

MCS2 では、 $n=0$  および 1 の条件についてはシミュレーションは必要ない。前者に対しては累積滑動量はゼロで、後者については得られている確率分布関数の滑動量が正の範囲をそのまま用いて、各々に対応する重みを割り付ける。よって表-3 に示したケース 1 の場合はシミュレーションの対象となるのは  $n=2\sim 4$  の場合のみである。

MCS2 における具体的な方法は以下の通りである。まず試行回数を  $N$  回とする。 $n=2\sim 4$  のそれぞれについて  $N$  回の試行を行う。

今仮に得られている確率分布関数を対象に crudeMCS

を実施したとすると、仮定の試行回数  $N_p$  に対して累積量がゼロとなる回数は  $p_0 \times N_p$  である。さらに、確率分布関数において値が正の範囲が  $C_p$  だけ数値化されていたとする (図-14 に示す滑動の 17.1, 15.5, ... という数列のうち正の部分の数) と、50 年累積のうち 1 回のみ正の値がサンプリングされる確率が  $p_1$  であり、全体の回数が  $p_1 \times N_p$  あってこれを均等な重み  $C_p$  で除することで各滑動量の試行回数が  $p_1 \times N_p / C_p$  と得られる。

$n=2\sim 4$  についても同様である。例えば  $n=2$  については、 $N$  回の試行結果の各々を回数  $p_1 \times N_p / N$  と見なせばよい。破壊確率は、滑動量が許容値を超える重みの累積値を全体の累積値で除することにより求めることが出来る。

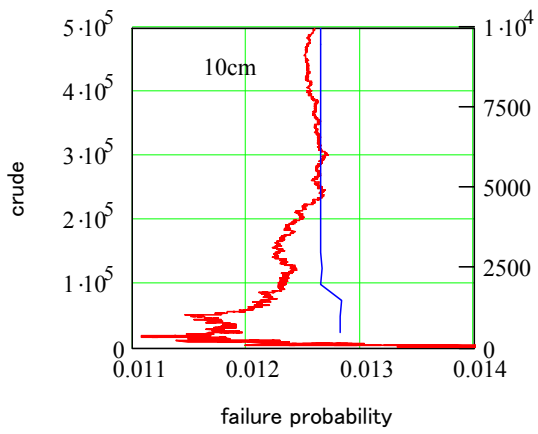
MCS2 における破壊確率の収束状況を図-17 に示す。図の鉛直軸は試行回数であり、左側が crudeMCS、右側が本研究の MCS2 の上記の  $N$  回に対応する試行回数である。

MCS2 は MCS1 の処理を経た後のシミュレーションであるので crudeMCS と回数の直接比較は出来ないが、収束状況を確認しやすいように並べて示している。

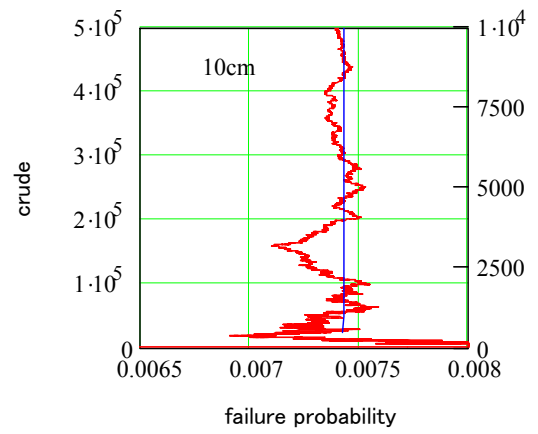
図より、MCS2 は収束が非常に早く、ここでは 1 万回までの試行としたが、3000 回以内に何れのケースも収束していることを確認した。この例では、 $d_a=30\text{cm}$  の条件を除いては crudeMCS は  $3 \times 10^5$  回程度で収束しており、その条件において crudeMCS による破壊確率と本研究による破壊確率はよく一致している。

$d_a=30\text{cm}$  では両者の破壊確率にやや差があるが、crudeMCS の結果を見ると  $5 \times 10^5$  回でもまだ収束していない可能性がある。

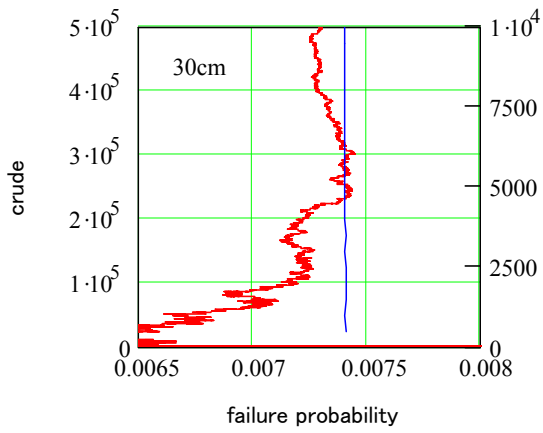
図-18 には、図-13 に MCS1 の収束状況を示したケース 7 の結果を示す。このケースにおいても、crudeMCS において  $3 \times 10^5$  回程度で収束している  $d_a=10\text{cm}$  の条件では両者の破壊確率はよく一致している。それ以外の条件ではやや破壊確率の差が見られるが、crudeMCS においても収束していない可能性がある。



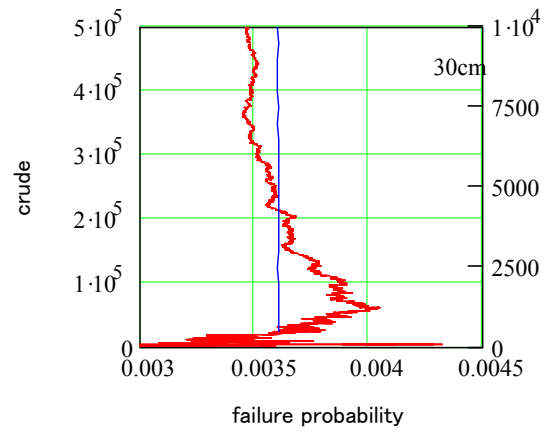
proposed



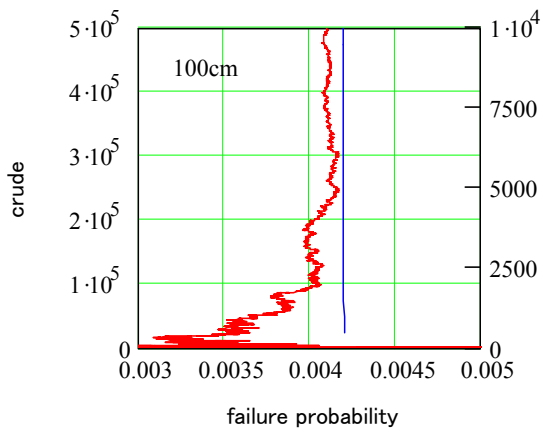
proposed



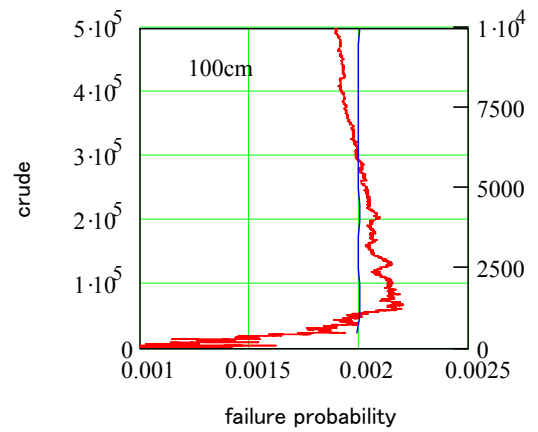
proposed



proposed



proposed



proposed

— crude — proposed

図-17 MCS2 収束状況 (ケース 1)

— crude — proposed

図-18 MCS2 収束状況 (ケース 7)

crudeMCS と本研究による方法の破壊確率の比較を図-19に示す。水平軸は crudeMCS による破壊確率、鉛直軸は crudeMCS による破壊確率に対する本研究による破壊確率である。

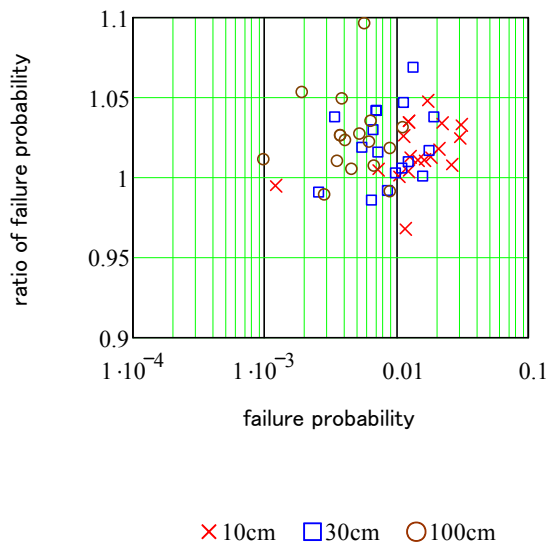


図-19 破壊確率の比較

また、破壊確率は、crudeMCS が試行回数  $5 \times 10^5$  回、本研究が MCS1 が  $2 \times 10^6$  回、MCS2 が  $10^4$  回値である。破壊確率の比の平均値は、 $d_a=10\text{cm}$ 、 $30\text{cm}$ 、 $100\text{cm}$  の順に 1.02, 1.03, 1.08 であった。また、比の値の上下限は、同じ変形量許容値の順に、 $0.97 \sim 1.05$ ,  $0.99 \sim 1.17$ ,  $0.99 \sim 2.05$  であった。

このように、平均的には  $d_a=100\text{cm}$  の条件を除くと本研究による破壊確率は crudeMCS と同程度の破壊確率であるが、一部のケースで crudeMCS の破壊確率は本研究の破壊確率よりも大幅に小さい結果となった。両者の破壊確率が大きく違う条件はケース 13, ケース 14 であった。

なお、上記の破壊確率の比の平均値であるが、 $d_a=100\text{cm}$  の場合について比の値が非常に大きいケース 14 を除外すると平均値は 1.03 となる。ケース 14 については MCS1 の収束状況は図-11 に示したとおりであり、重点サンプリング法による結果は  $2 \times 10^6$  回の試行で収束していると考えられる。

crudeMCS について、別途この条件について  $4 \times 10^6$  回まで試行回数を増やして検討したところ、 $5 \times 10^5$  回の結果と比較して違いはあるものの、その差は約 8%であつ

た。 $4 \times 10^6$  回と  $5 \times 10^5$  回で 8% の差があるということは、crudeMCS において  $5 \times 10^5$  回の試行では収束していないといえるが、それでも本研究の方法との差は大きい。従って、これらの破壊確率が非常に小さいケースについては、本研究の方法の MCS1 におけるサンプリング密度関数の設定方法に改善の余地があると考えられる。この点については今後の課題としたい。

さて、crudeMCS において、 $5 \times 10^5$  回試行における破壊確率と  $\pm 3\%$  の範囲に収まる試行回数を検討した結果を図-20に示す。破壊確率に応じて必要な試行回数は異なるが、 $4 \times 10^{-3}$  程度の破壊確率においても  $4 \times 10^5$  回程度の試行が必要となるケースがあることがわかる。

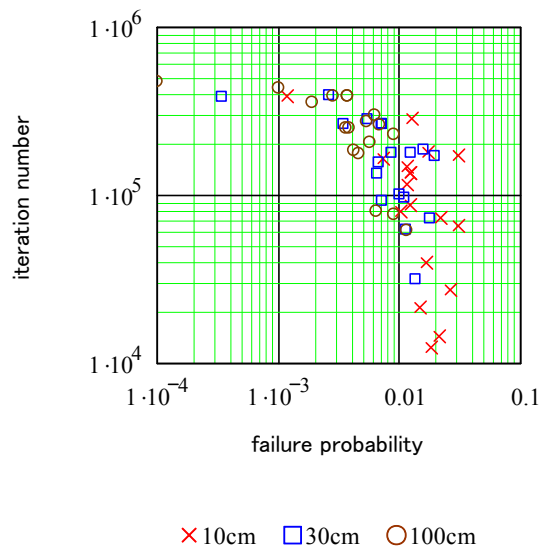


図-20 crudeMCS における必要試行回数

なお、上述のケース 14 の  $d_a=100\text{cm}$  における回数は図の一番左にプロットされている○マークのもので、この判定方法では  $4.8 \times 10^5$  回と判定されている。いずれにせよ、crudeMCS で十分な精度で破壊確率を評価するためには  $4 \times 10^5$  回程度の試行回数は必要であると考えられる。

本研究の MCS1 については試行回数が  $2 \times 10^6$  回であるので、設計供用期間 50 年の crudeMCS としては  $4 \times 10^4$  回に相当する。さらに、MCS2 は波浪のサンプリングにおける碎波の判定や運動方程式の積分などが一切なく、単純にサンプリングして数回加えるのみであるので、計算負荷が非常に少なく、非常に短い時間で計算が終了する。

以上を踏まえると、破壊確率が非常に小さいケースに

においてはサンプリング密度関数の設定に慎重な検討が必要であるが、本研究による方法で防波堤の累積滑動量に関する破壊確率評価の効率化が図られると考えられる。

## 5. まとめ

本研究では、防波堤の設計供用期間の累積滑動量に関する破壊確率のモンテカルロシミュレーションによる評価について、重点サンプリング法の適用によって効率的に評価を行う方法を検討した。本研究による主要な結論は以下の通りである。

①繰り返し作用による累積値に対するモンテカルロシミュレーションについて、繰り返し回数が多い場合には重点サンプリング法の適用にあたって慎重な検討が必要である。これは、繰り返し作用回数の増加に伴って design point が平均値に近付くことが原因である。

②このため本研究では、50年の累積滑動量に対する問題を1年の滑動量を求める問題としてまず扱い、ここに重点サンプリング法を適用して滑動量の確率分布関数を数値的に評価する方法を提案した (MCS1)。

50年の累積滑動量については、1年の滑動量に対する確率分布関数から50回サンプリングすることで評価することとし、確率分布関数において滑動量がゼロの確率が非常に高いことに着目して50年の滑動量の確率分布関数を効率よく評価する方法を提案した (MCS2)。

③crudeMCSで十分な精度で50年間の累積滑動量に対する破壊確率を評価するためには $4 \times 10^5$ 回程度の試行回数が必要である。これに対して本研究の方法では、MCS1では設計供用期間50年のcrudeMCSとしては $4 \times 10^4$ 回に相当する $2 \times 10^6$ 回試行回数で概ね十分であり、かつMCS2では3000回程度の試行回数で収束する。さらにMCS2は他のシミュレーションと比較して計算負荷が非常に少ない。

従って、本研究による方法で防波堤の累積滑動量に関する破壊確率評価の効率化が図られると考えられる。ただし、破壊確率が非常に小さいケースにおけるサンプリング密度関数の設定について、今後更に検討が必要である。

(平成20年11月14日受付)

## 謝辞

本研究を行うにあたり、沖波の極値分布データは各地方整備局より提供して頂きました。また、検討に用いたプログラムは、前(独)港湾空港技術研究所・下迫健一郎

氏が作成されたものを改良しました。ここに深く感謝の意を表します。

## 参考文献

- 1) 国土交通省港湾局監修, (社)日本港湾協会: 港湾の施設の技術上の基準・同解説, 2007.
- 2) 下迫健一郎, 高橋重雄: 期待滑動量を用いた混成防波堤直立部の信頼性設計法, 港湾技術研究所報告, Vol.37, No.3, pp.3-30, 1998.
- 3) 田村 勉, 白川 浩: 一般化 Faure 列による準乱数とそのオプション評価への応用, ジャフイージャーナル, pp.95-115, 東洋経済新報社, 1999.
- 4) 長尾 毅, 吉岡 健, 尾崎竜三: モンテカルロシミュレーションを用いた防波堤の滑動量に関する破壊確率の算定精度向上に関する研究, 国土技術政策総合研究所資料, No.465, 2008
- 5) Harbitz, A.: An Efficient Sampling Method for Probability of Failure Calculation, Structural Safety, Vol.3, No.2, pp.109~115, 1986
- 6) Shinoda, M., Hori, K., Yonezawa, T., Tateyama, M. and Koseki, J.: Reliability-based seismic deformation analysis of reinforced soil slopes, Soils and Foundations, Vol.46, No.4, pp.447-490, 2006
- 7) 篠田昌弘, 佐藤忠信, 米澤豊司: 複数の潜在的すべり線を有する斜面の限界状態超過確率の効率的な算定方法, 土木学会論文集 C, Vol.63, No.3, pp.812-824, 2007
- 8) 日本建築学会: 構造物系の非線形・不確定モデリング, 応用力学シリーズ 6, 1998
- 9) 吉田郁政, 鈴木修一: 限界地震動指標を用いた損傷確率の効率的な算定方法, 構造工学論文集, pp.201-206, 2003
- 10) 谷本勝利, 古川浩司, 中村廣昭: 混成堤直立部の滑動時の流体抵抗力と滑動量算定モデル, 海岸工学論文集, Vol.43, pp.846-850, 1996.
- 11) 長尾 毅: ケーソン式防波堤の外的安定に関する信頼性設計法の適用, 土木学会論文集, No.689, I -57, pp.173-182, 2001.
- 12) Matsumoto, M. and Nishimura T.: Mersenne Twister: A 623-dimensionally equidistributed uniform pseudorandom number generator, ACM Transactions on Modeling and Computer Simulations, 8, pp.3-30, 1998.
- 13) Rackwitz, R. and Fiessler, B.: Structural Reliability under Combined Random Load Sequences, Computers & Structures, Vol. 9, pp.489~494, 1978

- 14)吉岡 健, 長尾 毅: ケーソン式防波堤の外的安定 に関する安全性指標と感度係数の関係, 海洋開発論文集, 第 20 巻, pp.197-202, 2004 研究所報告, Vol.45, No.3, pp.3-23, 2006.
- 15)下迫健一郎, 大寄菜々子, 中野史丈: 滑動量を要求性能に設定した混成堤の信頼性設計法, 港湾空港技術